

2012 年度シェイクスピア祭

4 月 22 日（日） 聖心女子大学 宮代ホール

朗読劇『夏の夜の夢』始末記

河 合 祥 一 郎

2011 年のシェイクスピア祭での朗読劇『十二夜』に引き続き、今年も新国立劇場演劇研修所卒および研修所に在籍中の若い俳優たちに出演してもらって、今年も『夏の夜の夢』を新たに訳し、朗読劇として上演した。

新訳に当たって、『新訳 十二夜』と同様、行末押韻（ライム）はすべて訳出することにした。ところが、初期喜劇である『夏の夜の夢』には円熟期の『十二夜』よりも遥かにライムが多いため、大いに難儀した。途中何度も匙を投げたくなかったが、なんとかやりおおせ、これにカットを加えて 100 分の上演台本とした。

上演に当たって何よりもうれしかったのは、『十二夜』をご覧になって感動したと言って下さった作曲家の後藤浩明さんが『夏の夜の夢』の舞台音楽を作曲して下さったことである。非常にお忙しいなか、妖精が踊る歌を始め、美しい劇中の音楽を数曲作って下さった。改めて感謝を申し上げたい。

妖精役の女優たちは、後藤さんと歌稽古を重ねた上で、小さな翼をつけて歌って踊ってくれた。その歌詞の冒頭――

まだらの蛇よ、巢にお戻り。
針ねずみも、ここ来るな。
悪さをおやめ、とかげにイモリ。
お妃様に近寄るな。

——「戻り」と「イモリ」が韻を踏む abab の押韻になっている。

台詞のほうも、たとえば、パックの台詞では、

魔法にかかれ、この野郎、
その目にたっぷり塗ってやろう。
覚めりゃかかるぜ、恋の病、
二度と眠りはやってくるまい。

などのように、aabb と二行連句が続いたりする。全編このように押韻がちりばめられている作品をすべてこの調子で訳出したわけである。なお、『新訳 夏の夜の夢』は来年、角川文庫から出版される予定である。

昨年アンケート調査の結果、反省点が2つあった。

1つは、初めてシェイクスピア作品に接する人のために、プログラムに配慮があつてしかるべきだったこと。今年は、登場人物の関係がわかるようにプログラムに工夫を凝らした。

2つめは、「俳優たちが台本をずっと持っているのが気になる」という批判が多かったこと。そこで、今回は「朗読劇」と銘打ちながらも、台本を持たずに演じる場面を増やすことにした。立ち稽古のように台本を持って芝居を始めながら、台本を持たずに演技をする場面を増やしたのである。

また、普通の劇のように照明を暗くして夜の暗闇の雰囲気を作り出したり、夜が明けたときに明るくしたりと、演出も加えた。森の中での恋人たちの喧嘩や、

職人たちの劇中劇など、アクションが重要になる場面では台詞をすべて覚えてもらって台本を持たない演技とし、パックや妖精たちには終始台本を持たずに飛び跳ねてもらった。

昨年の出演者が 10 名だったように、今年も当初はテーセウスとオーベロン、ヒポリタとタイテーニアのダブリングを考え、10 名程度での上演を考えていたのだが、オーディションに応募してきた若者たちを一人でも切るに忍びなくなり、18 名全員に役を振ることにした。配役は以下の通りである。

テーセウス = 趙 ちよう よんほ 栄昊

ヒポリタ = 滝 香織

ヘレナ = 井上 沙耶香

ハーミア = 沖田 愛

ライサンダー = 梶原 航

ディミートリアス = 雄大

タイテーニア = 岡野 真那美

妖精一（蛾） = 北澤 小枝子

妖精（蜘蛛の巣） = 西井 裕美

妖精（豆の花） = 池田 朋子

妖精（芥子の種） = 落合 千恵

オーベロン = 片桐 レイメイ

パック = 野上 高弘

ボトム = 藤本 ごう 強

フルート = 田部 圭介

クインス = 森下 やすゆき 庸之

スナッグ、イジーアス = 頼田 昂治

スナウト、フィロストレート = 玉田 裕太

テーセウスやヒポリタや職人たちは自分の出がないときに調光室へかけあがって、照明操作をしてくれた。妖精たちは舞台上にしながら、背景の絵を変える操作を行った。

トラブルもあった。本番前日にスポットライトの電球が切れてしまい、急遽、本番早朝にレンタル屋からスポットライトを借りてきたのだが照度が弱く、闇夜での人物の顔をはっきり照らすことができなかった。最後のパックのエピローグでは、家族の協力を得て、強力懐中電灯2本で客席から照らしてもらった。

パワーポイントを利用した背景が表示されず、劇の開始が遅れた上、画像上にハイパーリンクが表示されてしまったのは本当に閉口した。パワーポイントを使用する際には、このようなことがないようにポインターを端に寄せておく必要があったのだが、そのことを知らなかったためである。

とはいえ、お客様には楽しんで頂けたようだ。私としても、若い俳優たちと充実した稽古時間を過ごせたことは楽しい思い出となった。

実際の上演がどうであったかについては、お客様の声を聞くよりほかない。300人収容のホールでほぼ満席となった入場者数は292名で、去年より5名多い。アンケートの中から、いくつか紹介しよう。

「音楽がとてもマッチしていておもしろかったです。」

「ユーモアにあふれた劇で、笑わせていただきました。現代風のアレンジが特に面白く、また見てみたいと思える内容でした。シェイクスピアをほとんど知らない私でも楽しめましたので、すばらしいと思います。」

「国の内外でも数えきれない程の回数を観てきた作品だが、今回は会場の新緑の借景のことも含めてとても新鮮で楽しかった。今日のような公演を新国立の小劇場などをつかってできるだけ多く催して、シェイクスピア劇を身近に楽しめるようにしてほしい。」

「初めて朗読劇を観て、とても新鮮でした。事前に本を読んでいたのですが、実際に劇として観てみると、自分の解釈とは違った表現であったりして、とても面白かったです。」

会場がとても狭く、演劇をやるための場所ではないので、どうやって演劇が出来るのだろうと不思議でしたが、とても上手く空間と設備を使っていらしたので、目からうろこが落ちました。特に最後、夜が明けたことを、ただ会場に電気をつけるだけでなく、カーテンを開けて、外の光を入れたところがとても綺麗でした。」

「朗読なのに、舌がもつれることが何度もあったのは何故？ 朗読だからまちがえたのでは？ 昨年よりも朗読らしくなかった。でも笑えました。おもしろかった。」

「新しい演出の企画であちらこちらからの入場よかったです。衣装もすっきりとまとめられて、おどり、せりふ若々しく感じられました。」

「400年前のグローブ座などでの芝居は将に今回の朗読劇のような塩梅であったのであろうと思われました。朗読劇ながら演技も結構なものであると思われました。スクリーンの写真もピッタリでした。」

「朗読とは思えないすばらしい出来でした。皆様の熱演にただ感動です。特にハーミアとヘレナ、ライサンダー、ディミートリアスの場面は迫力がありました。女性2人も大変でしたね。アザが出来たのでは？」

「韻律的文語的せりふが効果的と思いました。役者の力量も大したものと思いました。やはり台本を持たずに演じた方がはるかに迫力上ると思います。本式の公演を望みます。」

最後の方の意見にもあったが、ずいぶんしっかり稽古して一回きりの公演というのはもったいないというのが正直な思いだ。いずれどこか劇場で本格的な再演を……と思うのは夏の夜の空しい夢にすぎないだろうか。

なお、昨年『十二夜』でヴァイオラを演じた山崎薫さんは、この原稿執筆中の現在、野村萬斎さん主演の『藪原検校』に出演なさっていることも申し添えておこう。若手はどんどん育っている。『十二夜』のフェイビアン役の今井聡さんと『夏の夜の夢』のディミートリアス役の雄大さんは、2012年6月にイギリスのシェフィールドで催される演劇祭に参加すべく出発した。シェイクスピアをきっ

かけに様々な演劇的場面が広がることを望みたい。

最後に、多数ご来場下さったお客様、そしてアンケートにお答えくださった方々に改めて心から感謝申し上げたい。

ありがとうございました。

(東京大学教授)